授業名
日付
学籍番号　S15（漢字・カナ表記）

1. はじめに

日本で勉強している多くの留学生が、学会やミーティングなどの公式的な場面での発表を苦手だという。その要因として、日本語能力の不足、緊張など様々なことが挙げられる。そして、発表の仕方を教育するのもなかなか難しい。日本人にとって発表は意識しなくても自然にできるものであるため、そのコツを言葉に表すことが難しいのだ。この論文では、「接続表現」に焦点を当て、留学生の発表を助けるためのベストの教育方法を考察する。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

では、なぜ「接続表現」に焦点を当てるのか。それは、講義や発表など、二人以上の対話形式でなく、一人がずっと長く話す場合、接続表現が重要な役割を果たすからだ。石黒(2010)は、接続表現が重要情報予告機能を有しており、講義の要約文、講義のノートからそれを証明できると述べる。すべての接続表現が重要内容の前置きとして使われるわけではないが、理解を助けるツールとして機能しているのは確かである。

一方、留学生向けのプレゼンテーション教育をどう行うべきかについては参考となる論文もたくさんある。大島(2010)はその教育方法として、「複数ジャンル型」、「長期ジャンル型」、「融合型」の三つを提案している。複数ジャンル型の場合、毎回の授業で自己紹介、報告、企画など一つのテーマを決めてその日に短い発表してもらう教育方法である。一方、長期ジャンル型は一つのテーマをプロセスに沿ってコースを進んでいくものである。

この論文では、長期ジャンル型のモデルを参考にして、ボリュームのある長い発表をするときに、接続表現がどう役に立つのかを考察を行う。

3. 研究の資料と分析の方法

石黒(2010)の講義での接続表現の使用頻度を参考にすると、どの接続表現が講義でよく使われたのかが一目瞭然である。加えて、その接続表現の後にどういう内容がくればいいのかを分析して教育方法を作る。分析結果をもとに、研究に参加する留学生に接続表現を活用した発表の練習をさせる。例えば、「つまり」の後には、主に結論が出るとすれば、その部分だけの練習を繰り返すのである。ある程度なれてもらったら、全体の発表をしてもらう。もちろん、教育を受ける前にも発表をしてもらい、教育を受ける前と、受けた後の比較をする。さらに、聞き取り調査を通して留学生に接続表現を活用した教育方法で実際発表が

しやすくなったかを確認する。

4. 分析の結果